



**Data**

監督：マルティン・ギギ

出演：チャーリー・シーン/ウービー・ゴールドバーグ/ジーナ・ガーション/ルイス・ガスマン/ウッド・ハリス/オルガ・フォンダ/ジャクリン・ビセット/ブルース・デイヴィソン

### ■ショートコメント■

◆2011年9月11日のあの映像を、あなたはどこで観た？ 弁護士として最も忙しかつたあの頃、私はいつものように飲みに出かけていたが、北新地の某クラブでのたわいもないお喋りの中で、そのニュースを聞いた。今なら誰かがすぐにスマホでその映像を見せてくれるだろうが、その当時にそんなことは不可能。日付が変わって帰宅した自宅で、そのニュース映像に釘付けになったものだ。

それから16年後の今、「9.11の極限下で生まれた感動のヒューマンドラマ！」を謳い文句にした本作が登場。

◆公式HPによれば、本作のストーリーは次の通りだ

2001年9月11日、早朝。ニューヨークのワールドトレードセンタービル・ノースタワー内。二人の男女が、とある弁護士事務所で離婚調停中だ。夫のジェフリー（チャーリー・シーン）は、ウォール街の億万長者。家庭より仕事優先で世界中を飛び回っていた。17年連れ添った妻イヴ（ジーナ・ガーション）は、そんな身勝手な夫に失望し、離婚を決意。離婚したくないジェフリーは必死で妻を説得しようとするが結局は口論になるばかり。バイクメッセンジャーのマイケル（ウッド・ハリス）、美しく着飾ったティナ（オルガ・フォンダ）、ビルの保全技術者のエディ（ルイス・ガスマン）、そしてジェフリーとイヴの5人は偶然同じエレベーターに乗り合わせる。

突如、ビルに正体不明の飛行機が激突し、彼らは北棟の38階辺りに閉じ込められてしまう。外部との唯一の通信手段はインターコムを通じて話せるエディの同僚でオペレーターのメツィー（ウービー・ゴールドバーグ）だけ。彼女からアドバイスを受けながら脱出の方法を探るエディたち。

彼らは、崩れ落ちるビルと恐怖と闘いながら外への逃げ道を探す。そんなとき、奇跡的にイヴの母ダイアン（ジャクリーン・ピセット）から電話が鳴り、イヴは自分たち夫婦が閉じ込められたことを伝える。やがて5人は極限状態の中、それぞれの人生を振り返る。

改めてイヴの存在の大きさを感じたジェフリーは、イヴに約束をする。

「二度と淋しい想いはさせない」

そんな彼らが極限状態で下した決断とは――。

◆本作は9. 11を題材にした舞台劇『エレベーター』を映画化したものらしい。したがって、エレベーター内に閉じ込められた5人の会話と行動が本作の大部分を占めており、そんな極限の状況下でしか見るできないそれぞれの人間性に焦点を当てた映画だ。しかし、『キネマ旬報』9月下旬号の「REVIEW 日本映画&外国映画」でも指摘されている通り、映画では観客はスクリーン上に切り取ったものだけを観るが、舞台では観客は全体を見通すという違いがある。そのため、映画では舞台の演出とは異なる工夫が要請されるが、さて本作でのその成否は・・・？

◆妻イヴとの離婚調停の席上で、自分の主張を一方的にまくしたてる夫ジェフリーの姿を見ていると、私にはニューヨークのウォール街の成功者特有の「いやらしさ」がぷんぷん臭ってくる。しかし、エレベーター内に閉じこめられてからの彼の冷静沈着ぶりはさすがだ。本作では、90分に及ぶエレベーターという密室内での人間ドラマを彼の「人間力」を中心に引っ張っていくので、それに注目！

法廷劇の傑作中の傑作では『十二人の怒れる男たち』（57年）（『名作映画から学ぶ裁判員制度』19頁参照）は、12人の陪審員の審議室という密室内での人間ドラマが手に汗を握らせたが、さて本作は・・・？

◆災害や地震が相次ぐ今の時代、本作を観れば、高層ビルのエレベーター内に閉じこめられたらどうすべきかの参考になる。しかし本作では、エレベーターのオペレーターであるメツィーとの電話連絡が取れているのが不幸中の幸い。自らの危険を顧みず、メツィーもギリギリまで5人のために最大限の努力を続けたが、問題は時間との勝負。ビルの倒壊のスピードが速まっていくのは止むを得ない。さらに、エレベーターをつり下げているロープも切れかかっているようだから、5人の命はまさに風前の灯火だ。そんな極限状態で（のみ）見ることができる人間の本性を、本作ではじっくり鑑賞したい。

もともと、私の見るところ、本作は少しキレイ事すぎるのでは・・・？人間ってホントにみんなこんなにキレイなの・・・？そんな疑問も・・・

2017（平成29）年9月22日記